

末の娘がまだ小さく、生物は必ず死ぬと言う事をぼんやりと理解しはじめたころ、死んでしまった後もまた同じ家族で暮らしたいと泣いたことがある。広いあの世で先に来ている親をどう捜したらよいかわからないと言う訳である。とっさにはうまい返事ができず、「大丈夫、きっとあちらにも電話があるよ」と妙な慰めかたをした。しかし、「電話番号がわからない」と子供なりの理屈でつつこまれて閉口し、「今使っている番号でいいんだよ」と逃げてきりぬけた。

4月上旬に学会参加のため韓国の慶州を訪れた。釜山の空港への帰り道、タクシーの運転手に頼んで天馬塚の名前で有名な古墳を見学した。新羅王朝の古墳群は大変に良く整備された史跡公園になっている。折りからの観光シーズンでもあり修学旅行の中、高生で混雑し、また、平日にもかかわらず一般の観光客も多かった。天馬塚は中心部をくりぬいて展示室を造っており、様々な出土品をながめながら一時は時間を遡った気分になれるが、外にでると明るい陽の下での喧騒に巻き込まれる。学生の騒ぎ声に混じって声高に携帯電話をかける声もあちこちに聞こえる。ちぐはぐな気持ちで出口までの道を歩く内、古墳と携帯電話とが結びついて冒頭の娘の一件を思い出した。さらに気懸かりになっていた電話番号にまで連想が進む……………。

新羅の古墳ももちろんであるが、ピラミッドに代表される古代の墓の発掘では様々な副葬品が当時の人々の生活や感情の一端をしるばせてくれる。数万年前のネアンデルタール人の墓から一束の花が見つかったと言う話がある。人の死を悼む優しい気持ちが長い時間の隔たりを忘れさせる。死後の世界を信じた人々は死者がああ世でも不便を感じないようにと様々な品物を墓に入れた。これらの中には埴輪のように副葬品としてデザインされたものもあるが、当時の様々な実用品も多く貴重な資料である。今や、火葬の普及のために棺の中にはやたらなものを入れられない事情があるが、現代を象徴する副葬品としては何がふさわしいだろうか？

最近の若い人達の様子を見ていけば、第一候補は間違いなく携帯電話である。何千年か後に21世紀の墓地を発掘する考古学者は“携帯電話をかける埴輪”を見つけるかも知れないのである。ここまで考えたころ公園の出口に着き、待っていたタクシーに乗り込んだ。

慶州は桜が多く、東京近郊より10日ほど盛りが遅い。タクシーの窓から今年2度目の花見を楽しみながら考える。21世紀の埴輪である。電話番号がついているべきだが番号はどう決めたらよいだろうか？ どうせ使うものではないのだからと適当にしたのでは心がこもらない。しばらくして思い当たった。それは本人が使っていた番号の末尾にiをつけるというものである。我ながら名案だが後世の考古学者は意味を理解してくれるだろうか？ 余計な心配を始めた頃タクシーは金海国際空港に到着し、“あの世の電話番号”に関する考察は終りになった。

帰宅したら今は高校生になった娘に話そうと思っていたが、「お父さんの電話番号はもういらないわ」と言われそうでまだ話していない。